

菖蒲町生涯学習文化センター竣工記念
本多静六通信第十号・特別号

明治二十三年 洋行日誌

附・学位試験及び学位授与式の景況（明治二十五年）

本多静六博士を記念する会

明治二十三年 洋行日誌

附・学位試験及び学位授与式の景況（明治二十五年）

序 文

この「洋行日誌」は、本多静六博士の生家である折原家（埼玉県菖蒲町）に保管されていたものを、当主である折原金吾氏のご協力をいただき、このたびの菖蒲町生涯学習文化センターの竣工記念にあわせ、『本多静六通信第十号・特別号』として刊行するものです。

日誌には、明治二十三（一八九〇）年三月二十三日の横浜出港時の模様から同年八月十七日までの、三十八日間にあたる航海と、その後のドイツ国ターラントでの生活の様子等がこと細かく記されています。

また、一連の「洋行日誌」とは別綴にあつた「洋行日誌の内学位試験及び学位授与式の景況（明治二十五年・一八九二）」も同時期のことであるため併せて掲載したものです。

日誌の特徴は、本人の後日の記録というよりも、日誌中（35頁・六月二十九日の項）の「私の日誌は一にわが両親はじめ親、親族姉妹等の心を安心させるため、また楽しませるのを主としている」とあるように、ターラントでの生活はもとより、途中立ち寄った国々で見聞した出来事を、日本にいる妻や両親に興味深く伝えようとしているところにあります。

そのため、部分的にやや大袈裟な表現もみられますが、明治時代、大志を抱いて洋行した二十三歳の青年が初めて目にした中国、香港、そしてフランス、ドイツ等の国々の様子が生々しく描かれ、読み物としても楽しめる内容となっています。

さらにこの日誌は、単に本多博士の足跡をたどる資料となるばかりでなく、同時代に海外留学した人たちの様子をも伺い知ることができま

す。なお、日誌の原文は文語体で句読点はなく、漢字とカタカナのみであるため、一般の方にも読みやすくするため下記の凡例に従い改めました。

また本多博士について理解を深めていただくため、参考資料として博士の業績、博士が手がけた全国の公園等一覧、公園設計の特色、また博士がそのスタッフとして造営に携わった「明治神宮と本多博士」を掲載しましたので併せてご覧ください。

凡 例

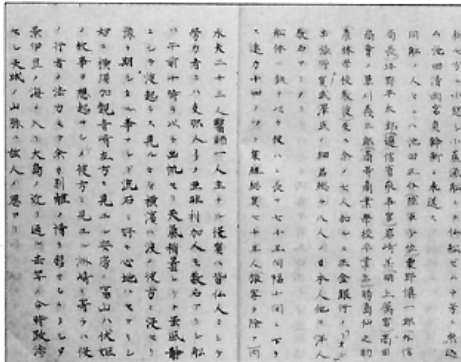
原文を尊重しつつ、最低限の句読点を加えるとともに、適宜現代文に改めた。

旧漢字については、名前意外については原則として常用漢字に改めた。難読文字、意味の解りにくいものについては、（ ）を付して、ふりがなや意味を補った。【例】鯨（しゃちほこ）、寒暖計四十五度（摂氏七・二度）

原文中（ ）で示されたものは、右の補注と区別するため「二」で記した。
日誌の多目的な活用を図るため、人名・地名索引を設けた。



東京帝国大学農科大学教授時代の本多静六博士



折原家に所蔵されている「洋行日誌」の一部

目次

明治二十三年 洋行日誌

▼特別寄稿

ターラントに於ける本多静六―コロキウム	1
「日独科学交流の伝統」から――	1
東京農工大学名誉教授 阪上信次	1

▼参考写真

.....	4
-------	---

■洋行日誌 卷一

第一報 芝より上海に至る（3月23日から3月29日まで）	5
第二報 上海に至る（3月29日から4月4日まで）	8
第三報 サイゴンよりシンガポールに至る（4月5日から4月7日まで）	12
第四報 シンガポールよりコロンボに至る（4月8日から4月19日まで）	13
第五報 アデンよりスエズに至る（4月19日から4月23日まで）	16
第六報 マルセイユ安着（4月23日から4月29日まで）	18
第七報 ターラント安着（4月30日から5月9日まで）	19
第八報 ターラントにて（5月9日から5月22日まで）	23
第九報 ターラントにて（5月23日から6月8日まで）	27
第十報 ターラントにて（6月9日から6月22日まで）	31

■洋行日誌 卷二

第十一報 ターラントにて（6月23日から7月5日まで）	34
第十二報 ターラントにて（7月6日から7月25日まで）	39
第十三報 ターラントにて（7月26日から8月10日まで）	44
第十四報 大修学旅行の道草（8月11日から8月17日まで）	47

■洋行日誌の内学位試験及び学位授与式の景況

（明治25年3月5日、9日、10日）	51
--------------------	----

参 考 資 料

▽「洋行日誌」人名索引	53
▽「洋行日誌」地名索引	54
▽本多静六博士の業績	55
▽本多静六博士設計による全国各地の代表的な公園	56
▽公園設計の特色	57
▽本多静六博士の手がけた全国の公園等一覧	59
▽明治神宮と本多博士	60
小山千秋	60